

「地球研言語記述論集」第6号 序文

千田 俊太郎

記述研は、今年度も新しいメンバーを迎えながら若干不定期ながら例會が開かれた。本来の活動の據点であつた地球研から少しく遠ざかり、京都大學の施設を借りての例會が主だつた。気軽に参加できて、誰に氣兼ねするでもなく、本音の議論を交はしてゆく本研究會のスタイルは變はらない。

ところで、私はこの研究會の創設時からの會員だが、2011年度より今年度の9月まで熊本大學に奉職してゐた關係で例會参加もなかなかかなはずにゐた。10月より幽靈會員から復歸したところで、思ひも掛けず序文を書くことになつた。そのやうなわけで、このところの研究會の様子をお傳へすることはできないが、以下の感想文をもつて序文に代へさせていただきたい。

本論集は七本の論文を収めてゐる。一つ一つに執筆者の個性が反映してゐて、言語の記述がこれほど個性的でありうるのかと感心した。また、いづれも若い勢ひに溢れてゐる。例會での活潑な言語談議を思ひ起こさせる。

鈴木博之さんの「カムチベット語小中甸・吹亞頂 [Choswateng] 方言の文法スケッチ」は「音體系」、「名詞句」、「動詞句」、「文のタイプと分類」の四つの柱からなる少々特徴的な文法スケッチである。鈴木さんはこの構成を「句構造の記述」といふ枠組みだといふ。「名詞句」の記述の比重が高く、なかでも格體系に多くのページが費やされてゐることから、今回の記述における鈴木さんの關心の中心を垣間見てとれる。全體に豊富な例示がなされてをり、資料の價値は長く残るであらう。鈴木さんの音記述に関する獨特の思ひ入れは常の通りである。

伊藤雄馬さんの「ムラブリ語の文法スケッチ」は「音韻論」、「標識・接語・接辭、節・句構造」、「品詞論」、「形態論」、「その他の文法範疇」、「語彙」からなる、これまた獨特の構成である。「語彙」が文法のいかなる位置を占めるか。伊藤さんは語彙意味論の分野と借用についての議論を組み込んでゐる。この文法スケッチの特徴は非文の提示が所々になされることにもある。また用語の定義と議論の筋道をしつかり付けてやりたいといふ意氣ごみがよく傳はつてくる。このスケッチに肉付けをするとどんな文法ができあがるか楽しみである。

植田尙樹さんの「モンゴル語における語頭母音添加」は語頭の r 及び語頭の子音連続に關する母音添加の實態を調査、調査語彙には「全話者の全環境で必ず母音添加が起こる、という語は1語もない」といふ状況ながら、母音添加は「語頭に r を持つ語、語頭子音連続を持つ語ともに、子音の直後という環境において最も母音添加の頻度が高く、文頭では頻度が低い」傾向や「語頭の r の前に添加される母音は、強勢を持つ母音ではなく、r の直後の母音がコピーされている」などの結論を得た。言語一般に、借用語がどのやうにレキシコンに記載されてゐるのか、

考へさせられる内容である。

倉部慶太さんの「ジンポー語の資料と文法注釈」は全 22 ページのうち約 6 ページが資料といふ構成で、資料の提出のみならず、倉部さんの興味を中心を知ることができる。例へば「はじめに」で示されたサブグルーピングの根據や文法註釋 4 に詳しい對句表現などは、獨立の論文もすでに書かれてゐる。テキストは、實はグロスがついてゐれば讀めるといふものではない。その意味からも詳しい註釋は有り難いものである。また、一篇の論文にならないやうな細かい事實、しかしその言語を讀み解くのに必要な情報を、世に傳へる方法として、たいへん参考になる。

白田理人さんの「奄美喜界島小野津方言の談話資料」も特徴的である。モノログでない少數言語のテキストはまだまだ少ないやうに思ふが、本資料は三人の話者による會話を扱つてゐる。會話資料にはモノログには見られない多くの特徴が現れる。質問と應答の在り方だけではない。發話は別の發話者に相槌を打たれ、補はれ、遮られる。書き起こしの苦勞が傳はつてくる。文法形式でいふと、談話標識、應答表現、文末助詞などの用法には、このやうな資料なしに記述ができないものも多いはずである。

古本真さんの「スワヒリ語の前鼻音化阻害音について」は前鼻音化音素を樹てる可能性について形態・音韻的に論じたものである。純粹に音韻論的な事實からは前鼻音化音素の系列を認める分析の方が「好ましい」。しかし、一つの音素をなすはずの前鼻音部と阻害音部の間に形態素境界があるやうにみえることがある。これは、9/10 クラスの名詞接頭辭 (の一部) とホストの間にシステマティックに出現してしまふ。古本さんの主要な議論は 9/10 クラスの接頭辭に移つてゆく。その結論は、この形態的な事實が前鼻音化阻害音の不在といふ音韻的な分析を必ずしも補強しないといふことにならう。慎重を期する表現だが、要は、前鼻音化音素を考へない理由はないといふのである。

最後はこの論集には珍しく古典語を扱つた、宮川創さんの「コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおけるスープラリニアーストロークと音素配列」である。宮川さんは、從來論據が不十分ながら採用されてきた、スープラリニアーストローク (SS) が成節子音を表はすといふ説について、豊富な具體例に基づいて再檢證を行なふ。主に音配列上の特徴を檢證した結果、辭書記載の單語のうち SS が付された部分が音節のソノリテイピークとなつてゐるパターンが約 67% と過半数を占め、これに合致しない場合も音配列の制約を考慮に入れた音節構造付與規則でほぼ説明が可能だといふ結論を得てゐる。

甲午年某月某日
千田俊太郎